Old Uigur texts from Turfan as sources for Central Eurasian history

松井太（弘前大學教授）

Dai MATSUI (Professor at Hirosaki University)

0．緒言

西暦8世紀中葉にモンゴル（Mongol）高原に興起したトルコ（Turk）系遊牧ウイグル（Uigur）帝國は，9世紀中葉に滅亡する。しかしウイグル遊牧民は，天山山脈東部地帯に移住し，9世紀末には西ウイグル王國と呼ばれる亡命王國を建てて，高昌（Qočo ~ Qara-Qočo > Pers. Qarā-Ḫuǧū）やトゥルファン（Turfan ~ Turpan > 吐魯番，土魯番，禿兒班）などの天山南麓・タリム（Tarim）盆地北縁の諸オアシス（oasis）都市を支配下に置いた。これ以降，ウイグル支配層は本來の遊牧文化とあわせてオアシス都市の定住文化をも受容し，また宗教的には佛教信仰に傾斜することとなる。一方で，タリム盆地のイラン（Iranian）系・インド（Indian）系・漢人の定住民も，支配者であるウイグル人の言語すなわちウイグル語（古代トルコ語）を習得するようになり，ここにタリム盆地がトルキスタン（Turkistan）すなわち「トルコ人の地」と化していく歴史的土壌が形成されていく。この西ウイグル王國は，13世紀の初頭に，チンギス＝カン（Činggis-qan）の建國したモンゴル帝國に歸順するが，西ウイグル國人はモンゴル帝國支配下で政治・軍事・經濟・文化など幅廣い方面で活躍した。しかし，15世紀から16世紀にかけて，天山山脈東部のイスラーム化が進行すると，佛教徒ウイグル人は歴史の表舞台からしりぞいていくことになる。

しかし，西暦19世紀末から20世紀初頭にかけて，トゥルファンをはじめとするタリム盆地の諸オアシス都市，さらには甘粛省の敦煌からは，彼らウイグル人がいわゆるウイグル文字（Old Uigur script）を使って書き残した古代ウイグル語文献（Old Uigur texts）が多數發見された。これらの古代ウイグル語文献の年代は，おおよそ西暦9世紀～14世紀に比定される[1]。この時期のタリム盆地を中心とする中央アジア（Asia）東部地域に關する情報は，東方の中國地域で編纂された漢文史料や西方のイスラーム（Islam）編纂史料には乏しい。従って，古代ウイグル語文献は，ウイグル人および彼らの居住地であった中央アジア東部地域の歴史さらには中央ユーラシア（Central Eurasia）史の研究において必要不可缺の一次史料といえる。

このような觀點から，本稿では，9～14世紀の中央ユーラシア史の再構成にとって重要な役割をはたしてきた古代ウイグル語文献を紹介する[2]。

1．遊牧ウイグル帝國時代～西ウイグル王國時代

トゥルファン盆地をはじめとする天山東部地方をウイグル遊牧民が

[1] 中國式の元號表記や六十干支紀年などにより絶對年代が判明するウイグル語文献は少ない。ほとんどの文献は十二支獸のみで紀年される。しかし，ウイグル文字の書體（楷書體・半楷書體・草書體）の相違や，特徴的な術語さらにはモンゴル語からの借用語の有無が，モンゴル期以前＝西ウイグル王國時代（9～12 世紀）とモンゴル帝國時代（13～14 世紀）に二大別する相對的な時代判定の指標となる。Moriyasu 1994, Moriyasu 2004 を參照。

[2] 古代ウイグル語文献を歴史學的に利用した古典的研究としては，Tikhonov (1966) や Gabain (1973) があるが，いずれも，近年の研究成果によって訂正されるべき點が多數存在する。古代ウイグル語文献に關する主要な研究成果については，文献目録 *Bibliographie alttürkischer Studien*（BATS）により書誌情報を知ることができる。また筆者は，すでに別稿 [Matsui 2009] で，古代ウイグル語文献研究の現況について概觀し，古代ウイグル語文献を所藏する研究機關の情報（World Wide Web による寫眞畫像の公開状況なども含む）や，近年精力的に活動している研究者とその主要な業績を中心に紹介しているので，本稿とあわせて參照されたい。

支配するようになったのは，9世紀中葉にモンゴル高原を離れて西方に移動するよりも前，8世紀末～9世紀初頭にさかのぼる。その契機となったのは，789～792年にかけて，東部天山北麓の北庭（Biš-Balïq）一帯をめぐるチベット（Tibet 吐蕃）帝國との戦争に勝利を収めたことである。主に漢文史料に依據していたかつての研究は，この北庭爭奪戦の最終的勝者をチベット帝國とみなしていた。しかし，トゥルファン出土の古ウイグル語文書，特にマニ教（Manichaeism）關係の文書が，この通説を覆すうえで重要な役割を果たした。その例として，ベルリン科學アカデミー（Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Akademienvorhaben Turfanforschung, 以下 BBAW と略記）所藏の2件のトゥルファン出土ウイグル語マニ教文獻を以下にかかげる。

U 1 (T II K 173), Blatt 1, Seite 2[3]

$_{1}$(t)ng(r)[i]kän $_{2}$uyɣur buɣuɣ xan $_{3}$qočo-ɣaru kälipän $_{4}$qoyn yïlqa üč $_{5}$maxi-stak olurma(q)$_{6}$üčün možakkä $_{7}$kingädi

「Tängrikän-Uyɣur-Buɣuɣ-xanは高昌に來て，未年に，3人のmaxistakを設置するために，možak に相談した」

U 168 (T II D 173a,2), Blatt II verso[4]

$_{13}$ymä tngri mani burxan $_{14}$tngri yiri-ngärü barduqïnta $_{15}$kin biš yu̱z artuqï äki-i $_{16}$ot'uzunč laɣzïn yïl-qa $_{17}$ötu¨käntäki nom ul-'uɣ'ï $_{18}$tükäl ärdämlig yrl-aq-qaručučï $_{19}$bil-gä bäg tngri mar niw mani $_{20}$maxi-stakka ai-ɣ'ïn bu äki

「そして聖なるマニ佛が天國へ赴いてから後，522年の亥年に，Ötükänにいる教義長老（すなわち）完全なる德をそなえ慈悲深き Bilgä-bäg が，Tngri-Mar-Niw-maxistak に，言葉により，この2（以下缺）」

[3] Le Coq 1912, p. 147; VOHD 13,16 #49.

[4] Le Coq 1911, pp. 11-12; VOHD 13,16 #319.

前者は，ウイグルの君主が「未年（qoyn yïl）」に高昌をおとずれ，マニ教會の最高位の聖職者 možak（慕闍）に，やはりマニ教の高位の聖職者である maxistak の設置について諮問したことを記す。後者は，マニ教の教祖マニ（Mani）の没後522年にあたる「亥年（laɣzïn yïl）」に，オテュケン（Ötükän）すなわちモンゴル高原のウイグルの本據地にいたマニ教の「教義長老（nom uluɣï）」が，トゥルファン地域の maxistak に連絡したことを示唆する。前者の「未年」は，種々の關係資料からみて西暦803年に比定され，後者でマニの没後522年にあたるという「亥年」は西暦795年に相當する。

すなわち，この兩資料は，8 世紀後半にマニ教を受容していた遊牧ウイグル國が，8 世紀最末期から 9 世紀初頭にかけて，トゥルファン地域および天山山脈東部地方のマニ教徒をも保護・支配していたこと，そしてマニ教を媒介とするトゥルファン盆地・天山山脈東部地域とモンゴル高原との人的交流がさかんにおこなわれたことを，明らかに示している。もしも，佛教國であるチベット帝國が 8 世紀末の北庭爭奪戰に勝利していれば，このような歷史状況が發生する可能性はないからである[5]。また，このような歷史状況があったからこそ，9 世紀中葉にウイグル遊牧民がモンゴル高原から天山山脈東部地域に移住して西ウイグル王國を建國できたのである。つまり，西ウイグル王國の成立と中央アジア東方地域のトルキスタン化という中央ユーラシア史の展開を把握する上でも，これらのトゥルファン出土ウイグル語文獻は貴重である。

西ウイグル王國を建設した 9 世紀末頃の遊牧ウイグル支配層の多くは，依然としてマニ教徒であった。北京の中國國家博物館に所藏されるウイグル文「マニ教寺院經營令規文書」（K 7709）は，10世紀前半に西ウイグル王國政府が高昌城内の基幹的マニ教寺院に對して發行した長大な文書であり，その内容は，教義によって經濟活動を禁止されているマニ教教團にかわり，西ウイグル政權がその財務經營を擔當

[5] Moriyasu 1979, pp. 215-217.

して，種々の特權を與えるというものである[6]。

一方，あらたに西ウイグル王國の支配下におかれた天山南麓の諸オアシス都市では，漢人やインド系・イラン系の住民が多數を占め，彼らが主に信仰する宗教は佛教であった。彼らタリム盆地の諸佛教教團は，マニ教のさまざまな宗教用語やマニ教經典の種々の形態的特徴を模倣しつつトルコ語＝ウイグル語の佛教經典を製作し，マニ教徒のウイグル支配層に對して熱心に佛教への改宗をはたらきかけた。この際に大きな役割を果たしたのは，トカラ（Tocharian）人佛教徒であった。そのことは，サンスクリット（Sanskrit）語起源のウイグル語佛教用語が，直接にサンスクリット語を借用したのではなく，まずサンスクリット語からトカラ語に借用された形式に由來していることから説明される[7]。さらに，10世紀後半になると，漢人の佛教教團が，トカラ佛教教團をうわまわる規模でウイグル人への佛教改宗工作を展開した。多數の漢文佛典がウイグルに翻譯され，ウイグル人佛教徒のなかにも漢文佛教を學習する者が増えていく[8]。

このように，ウイグル人のあいだに佛教が浸透した結果，10世紀末から11世紀初頭には西ウイグル支配層のほとんどが佛教に改宗し，ウイグル=マニ教は衰退に向かうこととなった[9]。その過程の一端を示すのが，PWD'N-VY'N-Käd-Oɣul-Šaxan-qya というマニ僧が記したM112 文書（BBAW 所藏）である。

M 112v

$_{12}$kyw'n pɣr-lïɣ kuu qoyn yïl-ïn tört a..rslan $_{13}$bilgä tngri ilig süngülüg qaɣan-nïng yrlïqïnga trkän tigin $_{14}$tngrim-ning äski ič balïq-nïng öngdün yïngaq idmiš üč čnggur-luɣ $_{15}$vrxar-ïɣ köčürüp a..stud vrzint možak uɣrïnta mnistan-ïɣ buzup $_{16}$vrxar itip 「土星のいる癸未年に，第 4 世 Arslan Bilgä 天王す

[6] Moriyasu 1991.

[7] Shōgaito 1978.

[8] Moriyasu 1989a; Moriyasu 1990.

[9] Moriyasu 1991, pp. 147–160.

なわち Süngülüg 可汗の勅令により，Tärkän 王子殿下が舊内城の東方に建設した 3 つの塔(?)のある佛寺を移轉させ，Astud Frazēnd možak の時にマニ教寺院を破壞して佛寺を建設して，（以下略）」

引用文中にみえる「土星のいる癸未年（kyw'n pγr-lïγ kuu qoyn yïl）」は，インド暦と六十干支を組み合わせて紀年を示したものであり，西暦983年に比定される。すなわち，この文書からは，西暦10世紀末に西ウイグル王（qaγan > 可汗）の承認のもとで，マニ教寺院（manistan）が破壞され佛寺（vrxar）に造り替えられるという事態が生じていたことが判明する[10]。

ウイグル人と漢人佛教徒社會との接觸は，經濟的側面にも及んでいた。兩者の接觸をもっとも如實に示すのは，諸種のウイグル文契約文書である。特に，1960年代に，護雅夫（MORI Masao）・山田信夫（YAMADA Nobuo）らは，ウイグル文契約文書とトゥルファン・敦煌出土漢文契約文書の比較史的考察をすすめ，ウイグル文契約文書の書式や，ウイグル語としては不自然な種々の表現が，時代的に先行する漢文契約文書に由來することを實證的に解明した[11]。さらに，近年，Peter Zieme と森安孝夫（MORIYASU Takao）により公刊された，西暦10世紀頃の漢文・ウイグル文兩語文書 U 5368（BBAW 所藏）も，ウイグル人が漢人の契約文書文化を受容したことを示すものである。

U 5368[12]

1a [賣地人多亥(?)　　]
1b yir satïγlï taγay čäk[　　]「土地の賣主 Taγay-čäk[…]」
2a 賣地人骨□[　　]

[10] Geng / Klimkeit 1985; Moriyasu 1991, pp. 147–154.

[11] Mori 1961a; Mori 1961b; Yamada 1965; Yamada 1967.

[12] Moiryasu / Zieme 1999, Ms II. 本稿では若干の校訂を加えている。

2b yir satïɣlï qut[ ] 「土地の賣主 Qut[…]」
3a 見人骨□[ ]
3b tanuq qut[ ] 「立會人，Qut[…]」
4a 見人寅只[ ]
4b (t)[anuq inč?] 「立［會人，Inč(?)］」

(Additional statement)
6a [ ]□文内計伍貫文還答[弥施]
6b [ ] biš qïrq quan baqïr tapmïš [ ]「35貫の銅錢をTapmïš…」
7a [ ]□在骨咄禄答弥[施將軍]
7b [ ] qutluɣ tapmïš sangun-qa [ ]「Qutluɣ-Tapmïš 將軍」

本文書は斷片的であるが，文中にみえる表現からみて，土地を銅錢（baqïr）により賣買する契約であることは確實である。また，漢文・ウイグル文雙方の字寸を比較すれば，やや大きな字で書かれた漢文部分が先に書かれ，その行間に小さな字でウイグル語の譯文が挿入されたことも明らかである。すなわち，本文書は，時代的に先行する漢語の契約文書文化・書寫文化がウイグル語文化に受容されていくという状況を反映している。その一方で，土地の賣主や，契約文書の立會人は，すべてウイグル語名をもっている（ただし，彼らが血統的にもウイグル人であったか，それともウイグル語名を使用していた漢人であったかは不明である）から，漢語を日常的に使用するオアシス定住社會で，ウイグル語の話者が徐々に優勢になっていくという，西暦10世紀頃のタリム盆地の「トルキスタン化」の歴史的實像がうかびあがるのである[13]。

[13] Cf. Moiryasu 1989b, pp. 51-54; Moriyasu 1996.

２．モンゴル時代のウイグル語文獻

西暦13〜14世紀にユーラシア大陸の大部分を支配したモンゴル帝國にとって，ウイグル人は，政治・經濟・文化の諸側面で，重要なパートナー（partner）となった。特に，初代モンゴル皇帝チンギス=カンが，モンゴル語を表記するためにウイグル文字を採用したことにより，モンゴル帝國の支配地域においては，ウイグル文字による識字能力が高級行政官僚としての必須技能となった。同時に，モンゴル帝國は，多數のウイグル人を，チンギス一族の師傅や行政・財務官僚として登用した[14]。

その結果，ウイグル人の活動圈は，彼らの元來の本據地である東部天山地方から，モンゴル支配下の各地に擴大することとなった。特に，大元ウルス（Dai-Ön ulus, いわゆる元朝）支配下の中國地域で印刷されたウイグル語佛典が，トゥルファン地域から多數發掘將來されていることは，ウイグル人佛教徒の活動圈が中國地域にまで擴大したことの傍證となる。その一例として，BBAW所藏の『文殊所説最勝名義經（*Mañjuśrīnāmasaṃgīti*）』斷簡の識語（colophon）部分（U 4759）を以下に示す。

U 4759[15]

10aṭï kötru¨lmiš šakimuni burxan u¨zä nom-latïlmïš
11arïš arïq bo nama sangit nom ärdini
ačari k(ä)ši karunadaz 12sidu u¨zä aɣṭarïlmïš-ï
adïnčïɣ mungadïnčïɣ taydu-taqï
13aq stup-luɣ uluɣ vaxar-ta

[14] モンゴル帝國におけるウイグル人官僚に關する歷史的研究としては，最近刊の Brose 2005 と，そこに引用される諸文獻を參照。ただし，Brose 2005 では，佐口透（SAGUCHI Tōru）や安部健夫（ABE Takeo）など日本人研究者の研究成果が十分に參照されておらず，またトゥルファン出土のウイグル語文獻が利用されていないなど，若干の問題點も殘る。筆者による書評（Matsui 2009b）も參照。

[15] BT XIII #50; BT XXVI #48.

14adruq šim šipqan-lïγ bars yïl yitinč ay-ta
alqu-15sï barča ala-sïzïn tu¨zu¨ yapa
adaq-ïnga 16tägi uz yarašï ädgu¨ti bu¨tu¨ru¨ldi sadu sadu

世尊たる釋迦牟尼佛陀により説かれた，清浄・妙美なる，この『文殊所説最勝名義經』という法寶は，阿闍梨師カルナダス（Karunadas）司徒により飜譯されたものである。比類なくすばらしき，大都の白塔大寺において，壬寅年の第七月に，すべてまったく遺漏無く，すべて最後まで巧みに注意深く終えられた。善哉，善哉。

この識語で，『文殊所説最勝名義經』のウイグル語譯者として言及されるカルナダス司徒（Karunadas sidu）は，『元史』巻134にその列傳が設けられている迦魯納答思（Karunadas）と同一人物である。彼は佛教および諸國語に通じていることから第５代モンゴル皇帝クビライ（Qubilai > 忽必烈，世祖）に推薦され，さらに元朝宮廷の國師（のちに帝師）とされたチベット佛僧パクパ（'Phags-pa > 八思巴）に師事してチベット佛教にも精通した。彼がウイグル語譯が完成させたとされる「壬寅年」は，大徳６年（1302）に比定される。識語によれば，この經典のウイグル語への翻譯作業は，「大都にある白塔大寺（taydu-taqï aq stup-luγ uluγ vaxar）」で行なわれたという。大都（Taydu）とは，いうまでもなく大元ウルスの首都だった大都（すなわち現在の北京）であり，「白塔大寺」とは，今なおチベット佛教様式の白塔を有することで著名な妙應寺（元代の大聖壽萬安寺）に相當すると考えられている。すなわち，大元ウルス宮廷に出仕したウイグル人佛僧によりウイグル語に翻譯された佛典が現在の北京地区・華北で印刷され，さらにトゥルファン地域にまで輸送され流布していたこととなる。

また，やはり BBAW 所藏の「庚午年八月初一日（king šïpqanlïγ yunt yïl säkizinč ay bir yangï）」の識語を有する印刷佛典 U 4707 は，右丞（yiučing）として雲南（Qaračang）に派遣されたヨル=テ

ミュル（Yol-Tämür）というウイグル人官僚の無事を祈って，彼の妻シャラキ（Šaraki）が施主となって印刷させたものである。このヨル=テミュルという人物は，『元史』をはじめとする漢文史料で，雲南行省右丞として反亂軍の鎮圧にあたった「躍里鐵木兒」という人物に同定され，識語の「庚午年」は文宗の至順元年（1330）に比定される[16]。

これらのウイグル語佛典は，大元ウルス支配下の中國地域とトゥルファン〜舊西ウイグル王國領にまたるウイグル人佛教徒の文化的ネットワーク（network）を示すものといえる[17]。なお，ウイグル語佛典の識語は，當該佛典の翻譯・書寫・板刻などの製作過程や，その製作にかかる費用を提供した施主などの情報を多く含んでおり，ウイグル佛教經典を生み出した母體となるウイグル佛教徒社會のありさまを再構成するための重要史料となりうることを特記しておきたい[18]。

ウイグル人がモンゴル帝國に接近し，そのユーラシア支配に參畫する一方で，彼らの本國である西ウイグル王國領にも，モンゴル帝國の支配權力が着實に浸透することとなった。モンゴル帝國に歸順した後，歷代のウイグル王は，モンゴル帝室から公主を降嫁され，その本領を安堵されていたものの，實際には，彼の權威・統治權は，皇帝とチンギス王族たちを推戴するモンゴル支配層に凌駕されるようになった。

その一例として，西曆1280年（至元十七年庚辰）に，シヴサイ大師(Šivsay-tayšï）という名のウイグル佛僧が，自分の所有する奴隸Pintung（く 斌通）を解放したことを證明するために作成した文書から，注目すべき部分を引用する。

SUK Em01

第2-6行：$_{2}$uluγ suu-qa buyan-ï tägzu¨n anta basa aqa ini

[16] Oda 1984; BT XXVI #6.

[17] Kudara / Zieme 1985, pp. 29–35, 43–48.

[18] ウイグル語佛典の識語からウイグル佛教史を再構成した代表的な研究として，まず第一に參照すべきは Zieme 1992 である。さらに，ウイグル文識語そのものの歷史的發展・変容を分析した笠井幸代（KASAI Yukiyo）の研究［BT XXVI］も重要である。

oɣul-lar-qa buyan-ï tägzu¨n basa qočo il $_{3}$bägd-läringä ančašï-lar-qa šazïn ayɣučï-qa šazïn uluɣ-larïnga il-kä bodun-qa $_{4}$quvraɣ-qa alqu tïnlɣ uɣuš-ïnga anta basa baxšïm uluɣ-um käv baxšï-qa $_{5}$mäning öz bodum-qa kisim-kä oɣlan-larïm-qa basa äsän toɣrïl turmïš tutung $_{6}$aḍay tutung ögru¨nč qïz bašaq-a bašlap uruɣ-qa qadaš-qa buyan-ï tägzu¨n 「モンゴル皇帝陛下（uluɣ suu）に福徳あれ，さらにまた（皇帝の）兄弟子息（王子）たちに福徳あれ。また高昌地方のベグたち（bäg(äd) < bäg, 官員）に，按察使（ančašï）たちに，教義総統（šazïn ayɣučï）に，教義長老（šazïn uluɣ）たちに，郷民に，僧衆に，一切衆生に，次いでまた私の師匠，私の先達である教師に，私自らの身に，私の妻に，私の息子たちに，また Äsän-Toɣrïl，Turmïš 都統，Atay 都統，Ögru¨nč-qïz，Bašaq-a を始めとする宗族・親類に福徳あれ」

第15-16行：$_{15}$uluɣ suu-qa bir altun yastuq aqa ini tägiḍ-lär birär ku¨mu¨š yastuq ïduq qut-qa $_{16}$bir yastuq šazïn ayɣučï-qa bir at qïṣɣuḍ öḍu¨nu¨p sözläri yorïmazun「この證文中の文言に私達が違反すれば，モンゴル皇帝陛下に１金錠，（皇帝の）兄弟王子たちにそれぞれ１銀錠，ウイグル王（ïduq-qut）に１錠，教義総統に１頭の馬を罰として獻呈し，彼らの文句（異議）は通用してはならない」

前者（第2-6行）は，奴隷解放という自身の善行が諸方面に祝福を與えるよう，シヴサイ大師が祈願したもの（祝福文言）である。後者（第15-16行）は，文書内容に違反して異議を申し立てる關係者たちへの罰（違約罰）に言及したものである。

注目すべきは，前者の「祝福文言」で，皇帝をはじめとするモンゴル皇族や，ベグ・按察使など在地の官僚・世俗權力者，教義総統・教義長老らの宗教權力者が言及される一方で，イドゥクト（ïduq-qut > 亦都護，「聖なる天寵」の意）を稱したウイグル王が言及されてい

ないことである。確かに，後者では，違約罰の納入先としてウイグル王が言及されるが，この違約罰文言はあくまで證文の効力を高めるために定型的に記されるものであり，現實の納入を意識して書かれたものではなかった。むしろ，モンゴル時代のウイグル文契約文書には，違約罰の納入先についても，モンゴル皇帝に言及しながらウイグル王には言及しないもののほうが多いのである（SUK Sa11, Sa12, Sa27, Ad01, WP01, Mi03）。すなわち，モンゴル時代になると，トゥルファン地域のウイグル住民は，舊來の國主であったウイグル王ではなく，モンゴル帝國の皇帝・皇族たちを，自らの支配者としてより強く認識するようになっていたのである[19]。

モンゴル支配の影響は，ウイグル人たちの住民意識だけでなく，現實の社會經濟的諸側面にも着實におよんでいた。特に，モンゴル帝國は，支配地域に對して各種の新たな税役・貢納を導入したが，ウイグル王國領もその例外ではなかった[20]。

モンゴル時代のウイグル王國領の税役制度を考えるうえで重要なウイグル語文書として，BBAW所藏の U 5330 文書を示す。この文書は，まず Radloff により公刊され（USp No. 77），それ以來，多くの研究者により引用・着目されてきたが，近年の筆者の研究（Matsui 2004; Matsui 2010）で新たな分析を加えられ，佛教教團の田地を實力で占據したウイグル農民たちが，予想される佛教教團との紛爭に對して，一致團結して對抗することを誓言した盟約文書であることが判明した。彼らウイグル農民たちは，佛教教團との紛爭にいたる以前の状況を，以下のように傳えている。

U 5330

$_{6}$oza-tïn bärü čïqtïn-nïng $_{7}$tarïɣ tarïr yir-in bodun tarïnïp yir baš-ïn-ɣa qalan $_{8}$tutup bodun kingäšip qalan-sïz quvraɣ-lar-

[19] Umemura 1977.

[20] ウイグル語社會經濟文書にも，モンゴル遊牧民の家畜税に由來する qupčïr 税や，商業税（tamγa）などの用例が確認される。Matsui 1998a, Matsui 2002, Matsui 2005 を參照。

qa qalan-lïγ 9yir-tä quvraγ-qa birẓä birmiš yir-kä qalan tuḍup 10sanggik yir-ni qalan-ïn tuḍmatïn sngïn birip quvraγ-11qa yaq-a-sïn birip yorïr ärti 「以前からずっと，チクティム（Čïqtïn < 赤亭，現在の七克臺）の穀物を耕作する田地を人々が耕して，その田地に基づいてカラン（qalan）を負擔していたが，人々が協議して，カランを賦課されていない佛僧たちに，カランの賦課される田地から（その一部を）佛僧に與えたので，與えた田地についてのカランを負擔し（負擔せず(?)），寺院の田地を（耕作して）そのカランを負擔することなく，その地税（s(a)ng）を支拂い，（また）佛僧への小作料を支拂って暮らしていた」

すなわち，ウイグル農民たちは，自分たちの所有する田地に賦課されるカラン（qalan）を低減するため，カランを課されない佛教教團に自らの田地を寄進し，新たな地主となった佛教教團から田地を租借して，教團には小作料（yaqa）を支拂い，また田地に課される地税（sng ~ sang）も負擔したという。カランとは，モンゴル帝國により支配下地域に導入された税役の一種で，イラン地域では夫役・軍役を意味しており，またモンゴル語の alban (~ alba)「夫役，強制労働」に對應するものと考えられていた。また，モンゴル帝國とくに元朝は，佛教をはじめとする宗教教團に對して，地税・商税は負擔させるものの，それ以外の種々の夫役を免除していた。この U 5330 文書で，一般農民にカランが課されていること，そのカランが佛教教團からは免除されていること，しかし佛教教團所有の田地に地税が課されていることは，モンゴル帝國の宗教教團に對する課税政策がウイグル王國領でも適用されていたことを示すものである[21]。

また，モンゴル帝國は，廣範な支配地域で驛傳（ǰamči > 站赤）の交通網を整備し，驛傳を利用する使臣（elči）や交易商人・宗教巡礼者たちに規定に應じて食糧や種々の物資を供給して，ユーラシア交流

[21] Matsui 2004c; Matsui 2010.

を推進した。ウイグル王國領もその交通網に組み入れられたことが，使臣への物資供給關係する多數のウイグル語社會經濟文書からうかがえる。以下にその一例を示す。

U 5308

$_{1}$ït yïl bigrminč ay iki otuz-qa $_{2}$yanga buqa yočïn ilči-kä altï $_{3}$otuz-qa-tägi käẓig aš-qa bir qap $_{4}$bor-nï biku¨š buqa borluq-ï birzu¨n

「戌年十一月二十二日に。Yanga-Buqa と Yočïn 使臣への，二十六日までの分例（käẓig）の食糧として，1 qap の葡萄酒を，Biküš-Buqaの葡萄園が供出せよ」

この文書は，Yanga-Buqa と Yočïn という２名の驛傳を利用する使臣（ilči）たちに，５日間の食糧として 1 qap の葡萄酒を支給するよう，ウイグル住民に命令するものである。ウイグル語の容量單位 qap は，モンゴル時代には漢語の容量單位「斗」（約 8.4 リットル）に相當するので，この文書では，使臣１名に對する１日あたりの葡萄酒支給量を1/10斗＝１升（0.84リットル）と算定していることとなる。そして，この支給額は，『站赤』などの漢文史料にみえるモンゴル帝國の驛傳利用規程と一致するのである[22]。

また，大元ウルスが導入した紙幣（交鈔）も，トゥルファン地域にまで流通することとなった。交鈔を通貨として使用するウイグル文契約文書の例（SUK Sa11, Sa12, Sa24, RH03, Em01）にくわえて，近年あらたに紹介されたウイグル語帳簿**様**文書 *U 9196（T III M Kloster 2 Nr. 134）では，交鈔の**収**支を記**録**するにあたり，yastuq「錠（銀 2kg に相當する貨幣單位）」，stïr（~ sïtïr)「兩（＝1/50錠）」，baqïr「錢（＝1/10兩）」という單位に加え，漢語の「分（＝1/10錢）」から借用された vunというごく小さな單位も用いられ

[22] Matsui 2004a; Matsui 2004c; Matsui 2009c, pp. 35-38.

ていた[23]。これも，ウイグル王國領が大元ウルスの經濟網と緊密に結びつけられたことを反映する。

さて，14世紀とくに1330年代以降になると，東方の大元ウルスにかわって，中央アジア地域を本據とするチャガタイ=ウルス（Čaɣatai-ulus）が，ウイグル王國領・トゥルファン地域への支配を強めていった。そのことは，ウイグル語文書とくに行政文書にも反映している。チャガタイ=ウルス支配期のウイグル語行政文書には，「チャガタイ紋章」と呼ばれる雙葉状の紋章（）をもつ官印が多數みられ，また官印の捺印様式の點でも，大元ウルス支配時代の行政文書とは相當に異なるからである[24]。ただし，このようなモンゴル支配層内部での政權交代が，在地のウイグル住民の社會･經濟にどのような影響をあたえたのかは，未だに不明の部分が多い。この點は，大元ウルス支配時代のウイグル語文書群とチャガタイ=ウルス支配時代の文書群を通時的に比較して解明する必要がある。

3．結語

以上の諸例から，モンゴル時代のウイグル王國領（天山山脈東部・トゥルファン地域）の歴史研究において，古代ウイグル語文書が必須の歴史資料となり得ること，そしてモンゴル時代に關する漢文資料やペルシア語資料との比較検證が，有効な研究方法となることが了解されるであろう。

ただし，世界各國の研究機關に所藏される古代ウイグル語文獻は，いまだに解読・校訂されていないものが多數ある。また，現在では中國領となっている新疆ウイグル自治區や，敦煌その他の諸遺跡からも，今後の發掘調査によって新資料があらわれる可能性もある。すべての古代ウイグル語文獻について，歴史研究者が依據できる文獻學的校訂

[23] VOHD 13,22 #306; Matsui 2009c, p. 35.

[24] Matsui 1998b; Matsui 2003.

テキスト（Text）が準備されるには，なお相當の時間を要するであろう。その一方で，特に社會經濟文書をはじめとする世俗文書の内容理解については，文書の背景についての歷史的な考察も不可缺である。従って，古代ウイグル語文獻の研究は，言語文獻學と歷史學の兩方の視點からすすめられなければならず，相互の研究成果を不斷にとりいれていく必要がある。

文獻目録 Selected Bibliographies & 略號表 Abbreviations

Abe Takeo 安部健夫 1955: 西ウイグル國史の研究 *[Historical study of the Western Uighurs]*. Kyoto.

BATS = Volker Adam / Jens Peter Laut / Andreas Weiss (eds.), *Bibliographie alttürkischer Studien*. Wiesbaden, 2000. Supplemented in: *Ural-Altaische Jahrbücher*, Neue Folge 17, 2002, pp. 234-239; *Ural-Altaische Jahrbücher*, Neue Folge 18, 2004, pp. 202-207; *Ural-Altaische Jahrbücher*, Neue Folge 19, 2005, pp. 229-232; *Ural-Altaische Jahrbücher*, Neue Folge 20, 2006, pp. 228-232. Available online (http://www.bbaw.de/bbaw/Forschung/Forschungsprojekte/turfanforschung/de/Bibliographie)

BBAW: Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Akademienvorhaben Turfanforschung

Brose, Michael C. 2005: *Subjects and Masters: Uyghurs in the Mongol Empire*. Western Washington.

BT XIII: Peter Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*. Berlin, 1985.

BT XXVI: 笠井幸代 Yukiyo Kasai, *Die uigurischen buddhistischen*

Kolophone. Turnhout, 2006.

Gabain, Annemarie von. 1973: *Das Leben im uigurischen Königreich von Qočo (850-1250)*, 2 vols. Wiesbaden.

Geng Shimin 耿 世民 / Hans-Joachim Klimkeit. 1985: Zerstörung manichäischer Klöster in Turfan. *Zentralasiatische Studien* 18, pp. 7-11.

Kudara Kōgi 百濟 康義 / Peter Zieme 1985: ウイグル語の觀無量壽經 *[Guanwuliangshoujing in Uigur]*. Kyoto.

Le Coq, Albert von. 1911: Türkische Manichaica aus Chotscho I. *Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften*, phil.-hist. Klasse 1911, Nr. 6.

—— 1912: Ein manichäisch Buch-Fragment aus Chotscho. In: *Festschrift Vilhelm Thomsen*, Leipzig, pp. 145-154.

Matsui Dai 松井太. 1998a: モンゴル時代ウイグリスタン税役制度とその淵源 [Some taxation systems in Uiguristan under the Mongols and their origin]. 東洋學報 *Tōyō gakuhō* 79-4, pp. 026–055.

—— 1998b: ウイグル文クトルグ印文書 [Uigur adiministrative orders bearing Qutluγ-seals]. SIAL 13, pp. 1–62, +15 pls.

—— 2002:モンゴル時代ウイグリスタンの税役制度と徵税システム [Taxation and Tax-collecting Systems in Uiguristan under Mongol Rule]. In: 松田孝一 K. Matsuda (ed.), 碑刻等史料の總合的分析によるモンゴル帝國・元朝の政治・經濟システムの基礎的研究 *[Research on Political and Economic Systems under Mongol Rule]*, Osaka, pp. 87-127.

—— 2003: ヤリン文書：14世紀初頭のウイグル文供出命令文書6件 [The Yalïn-texts: Six Uigur administrative orders from the early fourteenth century]. 人文社會論叢：人文科學篇 *[Studies in the humanities, Volume of Cultural sciences]* 10, pp. 51–72.

—— 2004a: Unification of weights and measures by the Mongol Empire as seen in the Uigur and Mongol documents. In: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan Revisited,* Berlin, 197–202.

—— 2004b: モンゴル時代の度量衡 [Weight and Measures under Mongol Rule]. 東方學 *Tōhōgaku* 107, pp. 166-153.

—— 2004c: モンゴル時代のウイグル農民と佛教教團 [Uigur peasants and Buddhist monasteries during the Mongol period]. 東洋史研究 *Tōyōshi kenkyū* 63-1, pp. 1–32.

—— 2005: Taxation systems as seen in the Uigur and Mongol documents from Turfan: An overview. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* 50, pp. 67–82.

—— 2009a: Recent Situation and Research Trends of Old Uigur Studies. *Asian Research Trends*, New Series 4, pp. 37-59.

—— 2009b: Book Review: Michael C. Brose, *Subjects and Masters: Uyghurs in the Mongol Empire*, Western Washington 2005. *International Journal of Asian Studies* 6-2, pp. 247-249.

—— 2009c: Mongol Globalism Attested by the Uigur and Mongol Documents from East Turkestan. 人文社會論叢：人文科學篇 *[Studies in the Humanities, Volume of Cultural Sciences]* 22, Faculty of Humanities Hirosaki University, 2009.8, pp. 33-42.]

—— 2010: Uigur Peasants and Buddhist Monasteries during the Mongol Period. Re-examination of the Uigur Document U 5330 (USp 77). In: T. Irisawa (ed.), *"The Way of Buddha" 2003: The 100th Anniversary of the Otani Mission and the 50th of the Research Society for Central Asian Cultures*, Kyoto, pp. 55-66.

Mori Masao 護雅夫 1961a: A Study on Uygur Documents of Loans for Consumption. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 20 , pp. 111-148.

—— 1961b: ウイグル文消費貸借文書 [A Study on Uygur Documents of Loans for Consumption]. In: 中央アジア古代語文獻（西域文化研究 4） *[Buddhist manuscripts and secular documents of the ancient languages in Central Asia (Monumenta Serindia IV)]*, Kyoto, pp. 221-254.

Moriyasu Takao 森安孝夫. 1979: 増補：ウィグルと吐蕃の北庭爭奪戰及

びその後の西域情勢について [The Uyghur-Tibetan Struggle for Beshbalygh and the Subsequent Situation in Central Asia: An Enlarged Edition]. In: 流沙海西奨學會 Ryūsha Kaisei shōgakukai (ed.), アジア文化史論叢 *Ajia bunka-shi ronsō*, Vol. 3, Tokyo, pp. 199-238.

—— 1989a: トルコ佛教の源流と古トルコ語佛典の出現 [L'origine du Bouddhisme chez les Turcs et l'apparition des textes bouddhiques en turc ancien]. 史學雜誌 *Shigaku zasshi* 98-4, pp. 152-150.

—— 1989b: ウイグル文書劄記（その一） [Notes on Uighur Documents, I]. SIAL 4 (1988), pp. 51-76.

—— 1990: "L'origine du Bouddhisme chez les Turcs et l'apparition des textes bouddhiques en turc ancien." In: A. Haneda (ed.), *Documents et archives provenant de l'Asie Centrale*, Kyoto, pp. 147-165.

—— 1991: ウイグル=マニ教史の研究 [A study on the history of Uighur Manichaeism]. 大阪大學文學部紀要 *[Memoirs of the Faculty of Letters Osaka University]* 31/32. German translation: *Die Geschichte des uigurischen Manichaismus an der Seidenstrasse*. Tr. by Christian Steineck. Wiesbaden, 2004.

—— 1994: ウイグル文書劄記（その四） [Notes on Uighur Documents, IV]. SIAL 9, pp. 63-93.

—— 1996: Notes on Uighur Documents. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 53 (1995), pp. 67-108.

—— 2004: From silk, cotton and copper coin to silver: Transition of the currency used by the Uighurs during the period from the 8th to the 14th centuries. In: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), Turfan Revisited, 228–239.

Moriyasu Takao 森安 孝夫 / Peter Zieme 1999: From Chinese to Uighur Documents. SIAL 14, pp. 73-102.

Oda Juten 小田壽典 1984: 1330年の雲南遠征餘談 [An aside of the Yuan expedition to Yunnan of 1330]. 内陸アジア史研究 *[Inner Asian Studies]* 1, pp. 11-24.

Saguchi Tōru 佐口透 1943: モンゴル人支配時代のウイグリスタン

[Uighuristan duringng the Mongolian rule]. 史學雜誌 *Shigaku zasshi* 54-8, pp. 1-72; 54-9, pp. 72-97.

Shōgaito Masahiro 庄垣内 正弘 1978: 古代ウイグル語におけるインド來源借用語棄の導入經路について [On the routes of the loan words of Indicate origin in the Old Uigur language] アジア・アフリカ言語文化研究 *[Journal of Asian and African Studies]* 15, 1978, pp. 79-110.

SIAL: 内陸アジア言語の研究 *[Studies on the Inner Asian Languages]*.

SUK: 山田信夫 Nobuo Yamada, ウイグル文契約文書集成 *Sammlung uigurischer Kontrakte*, 3 vols. Osaka, 1993.

Tikhonov, D. I. 1966: *Khozjajstvo i obshchestvenyj stroj ujgurskogo gosudarstvo X - XIV vv.* Moskva / Leningrad.

Umemura Hiroshi 梅村坦 1977: 13世紀ウィグリスタンの公權力 [Official Powers in Uighuristan during the 13th Century]. 東洋學報 *Tōyō gakuhō* 59-1/2, pp. 1-31

VOHD 13,16: Jens Wilkens, *Alttürkische Handschriften*, Teil 8, *Manichäisch-türkische Texte der Berliner Turfansammlung*. Stuttgart, 2000.

VOHD 13,22: Simone-Christiane Raschmann, *Alttürkische Handschriften*, Teil 13, *Dokumente*, Teil 2. Stuttgart, 2009.

Yamada Nobuo 山田信夫 1965: ウイグル文貸借契約書の書式 [The Forms of the Uighur Documents of Loan Contracts]. 大阪大學文學部紀要 *[Memoirs of Faculty of Letters of Osaka University]* 11, pp. 87-216, +6 pls.

—— 1967: Uigur Documents of Sale and Loan Contracts Brought by Otani Expeditions. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 23 (1964), pp. 71-118, +4 pls.

Zieme, Peter. 1992: *Religion und Gesellschaft im Uigurischen Königreich von Qočo*. Opladen.